

近年、デリバティブ（金融派生商品）を扱う世界の市場の間でトレーダー（市場参加者）の獲得をめぐる競争が激化しています。市場が資産運用や公正な価格の形成、商品・資本の調達、リスク回避機能の提供—といった本来的な機能を果たすためには、いつでも売買ができる「流動性」に満ちた状態でなければなりません。このため市場の運営者である取引所は魅力ある市場作りを心砕き、市場参加者を増やそうと努めているのです。

国内の商品取引所も例外ではありません。金やガソリン、ゴムなどを取引する東京工業品取引所（東工取）は、5月に世界最速級のコンピューター取引システムを導入。1件当たり100分の1秒という注文処理速度を武器に、世界市場を舞台に積極果敢かつ大量の取引を繰り広げるプロトレーダーの市場参加促進に乗り出しています。

プロトレーダーを誘引

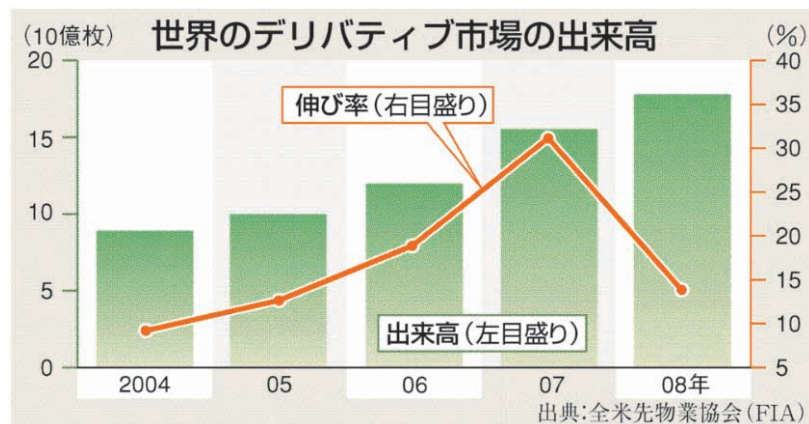
商品を含むデリバティブ取引市場の運営は、長年にわたり欧米や日本など一部の国が独占してきました。しかし市場主義経済のグローバル化、金融工学の発達、ITの普及に伴う取引・市場管理技術の進化を受け、各国は

独自の取引市場を開設。株式や債券など伝統的資産の取引市場はもとより、先物やオプションを取引するデリバティブ市場の運営を始めたのです。結果、現在では世界に約70ものデリバティブ取引所が誕生するに至っています。

市場間競争の激化は当然の流れです。もちろん各市場にはその地域に特有のメリットがあります。取引時間帯、固有の流通事情、建値（取引通貨）などですが、それだけではローカル市場の域を脱することができません。さらなる発展には世界からトレーダーを呼び込む必要があります。

トレーダーには資産運用を目的とし

最新システムで市場間競争勝ち抜く



? プロップハウス 顧客のためでなく自己資金で金融取引をする金融会社。市場の電子化の流れの中で、シカゴやロンドンでプロトレーダーが電子端末から売買を発注する形態が定着した。現在では日本にも多くのプロップハウスが誕生している。

の「ゆがみ」です。ある瞬間に生じた「ゆがみ」が本来あるべき価格に戻る前に、その価格差で生じる利ざやを瞬間に取りに行くのです。

ライバルは世界中にいますから「ゆがみ」を見つけてからキーボードをたたいている時間はありません。どういう条件で売るか、または買うかをあらかじめアルゴリズム（売買の手順）に組み、売買の発注はコンピューターから、まさに「光の速さ」で取引所に伝えるのです。

東工取の取引システムはそうしたプロトレーダーのニーズに応えるものです。ただ、ハードだけですべてが解決するわけではありません。東工取の世界水準の競争力強化策は、さまざまなソフト面にも及んでいます。

た個人投資家も、ヘッジ取引を求める事業会社もいます。昨今、最も注目を集めているのは圧倒的な投資資本を背景に、世界の市場を縦横無尽に駆け巡り、膨大な取引をこなすヘッジファンドやETF（上場投信）、投資目的の専門会社「プロップハウス」などのプロフェッショナルです。

光の速さへの対応

彼らの中には、最新の金融理論とITを背景に「アルゴリズム取引」と呼ばれる取引技術を駆使して市場に向かうケースも少なくありません。

主たる狙いは理論値から外れた価格